

武蔵野日曜聖書講筈

無者キリスト

——マタイ伝第5章1～12節——

1994年1月9日

小池辰雄

すべて告白 キリスト一切 無学の凡人 終り無き詩 聖書は降参しながら読む 聖霊の旗
降参・圧倒

【マタイ5】

- 1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。
- 2 イエス口をひらき、教えて言いたもう、
- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。
- 4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
- 5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がらん。
- 6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。
- 7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。
- 8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
- 9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。
- 10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。
- 11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、許りて各様の悪しきことを言
うときは、汝ら幸福なり。12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より
前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

●すべて告白

マタイ伝5章は、普通は「山上の垂訓」と言っているけれども、私は「垂訓」という言
いはあまり好きではない。キリストはすべて告白しておられる。

ゲーテは、

「自分の文学は全部告白である」

と言いました。我々も「について」語っているうちはダメなんです。自分を告白するよう
な角度でないと、人の魂には響かない。アウグスティヌスの『告白』というのはやはり素
晴らしい。しかも、その告白は神に向かっている。我々も本質的には、神・キリストに向
かっている告白です。人に教えようとか、人に説明しようとか、そういう意識ではダメです。



内村先生の集會に私が初めて行ったのは1923年2月25日です。丸の内の大手町の集會に出かけて行きました。私は大体まん中あたりに坐つた。壇上には、

「^{さいわい}福なり、心の貧しき者は。天国はその人のものなればなり。

福なり、悲しむ者は。その人は慰めを得なければなり。」

という言葉が大きく縦に墨書して掲げてあつた。これが最初に私が大手町でつくわしたところの福音なんです。これは福音の、キリストの言葉の一番根底のものです。

「心の貧しき」

は本当は、

「靈の貧しき」

です。この「心」は

「 pneuma (靈) 」

という字です。我々の靈が貧しいこと。「貧しい」というのは

「自分を何者ともしない」

ということです。キリストくらい自分を何者ともしなかつたひとはない。神一切です。

「^{みこころ}汝の聖意を成させたまえ」

とは、

「どうぞ、私を聖意のままにお使いください」

と、自分の願いや意志を棄ててしまつて、神の本願に託する。だから、キリストは自分が何もないから、私はキリストのことを

「無者」

という。キリストは最大の無者です。世界中に、そんなことを言うのは恐らくいないでしょうね。キリストというひとは、神の他何ものもない。ところが、この無は虚無ではない。即無限無量の無です。

「無即無限無量」

ということ。神さまが入ってくるから、内容は無限無量なんです。

「ゼロ＝無限大」

というわけです。

●キリスト一切

新年を迎えて、その角度で私の魂は出発しています。キリストは神一切である。私たちはキリスト一切です。イエス・キリストは大変なひとですから、宇宙的な魂ですから、その内容は無限無量です。こんな有難いことはない。

私が育つた無教会というのは、無教会信仰はとかく信仰をサムシングにしている。「自分の信仰」を何ものかと思つている。そんなのはダメです。



「私は信仰も何もありません。キリストの本願に圧倒されて生きています」と、そういうようにならないと、本ものにならない。圧倒されて生きていくということです。

「聖書研究会」

なんていつて、研究したつてダメです。無教会は昔から聖書研究というのが好きだが、研究会なんてよしたらいい。日蓮のように身読会でもしたらいい。身体からだで読む。福音は身体で受けとる。身受しんじゅです。頭でも心でもない。全身で受けとる。だから、力が来てしようがない。エレミヤも

「黙もだそうとしても、神の言は火のごとくで黙すわけにいかない」(エレミヤ20・9)

とか、パウロが

「力が来てしようがない」

とか言っている。あれはみなそうなんです、圧倒されているから。自分の願いなんか棄ててしまった方がいい。そうすると、本願の中に自分の願いは浄化されて、新しい姿で受けとられていく。

私が育った無教会には聖霊がなかった。二言目には「十字架」と言っている。「十字架、十字架」ではしようがないんだ。ルカ伝12章49～50節に、

49 我は火を地に投ぜんとて来きたれり。

キリストは火を地に投じようとしてやってきた。「火」とは聖霊の火のことです。

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

聖霊の火が燃えたら、もう望むものはないんだと。

50 されど我には受くべきバプテスマあり。

これが十字架のことです。

「十字架を通らなければ、贖罪の死を遂げなければ、お前たちには聖霊をやるわけにはいかない」

ということ。

その成し遂げらるるまでは思いせま逼ること如何許いかばかりぞや。

と。だから、

「聖霊を投ずる前に、私は十字架の贖罪を遂げなければならぬ」

ということ。キリストのこのルカ伝12章49節の聖言で、十字架と聖霊は切っても切れない関係だということがはつきりする。

「聖霊、聖霊」

とばかり言っている人たちもダメ、

「十字架、十字架」

とばかり言っている人たちもダメ。十字架と聖霊は離すことができない。一如の関係です。「十字架に架かつて贖罪を遂げたら、聖霊が臨んでくるぞ」



と、ちゃんと約束している。ルカ伝12章49節は非常に大事な節です。

我々はこのキリストの十字架を受けると無にされると、無者になる。自我が無くなる。相対的な人間小池は自我があるでしょう。しかし、その奥に恩寵の現実としては、私は自我がない。無者です。これは恩寵の現実、恵みの現実です。悟って自分がそう成ったのではない。新年はそこから始まらないとね。この無の現実は本当に新しい、古びない。

「謹賀新年」

なんて言うけれども、大体しばらくたつと古びてしまう。しかし、この無の現実は烈々たる魂にされる。クリスチャンで、くすぶっているようなのはクリスチャンではない。

「火を投ぜんがために」

で、火のごとくなる。お腹の中にはもの凄い霊火が燃えている。

●無学の凡人

キルケゴールが

「本当のクリスチャンは天才よりもなお少ない」

と言った。その通りです。いい加減なクリスチャンよりも、クリスチャンでない方がよほどいいよ、普通の人間の方が。キリスト者というのは、キリストを生きていなければしょうがない。

「わがうちにキリスト生きたもうなり」

ということ。

「それでは、貴方は立派か？」

なんて、私はひとつも立派ではない。立派でないから、キリストが入ってください。

「立派という前提がなければキリストは入ってこない」

なんて、そんなキリストではない。キリストはゴミの中に入ってください。塵埃じんあいが光る。

キリストは、キリストに依より頼んでいた群衆にも捨てられ、しまいには、弟子たちにも捨てられて、独りになってしまった。

「家造りらの棄てたる石は、これぞ隅すみの首石おやしとなれる」(マタイ21・42)

とある。捨て身のひとなんだ。捨てられたるひと。イザヤ書にも書いてある。そういう、棄てられたような、砕けたような存在が実は玉成する、玉と成る。クリスチャンという言葉葉自身が何か観念化してしまっているから、

「私は凡人ただびとです」

と言う。ペテロが言ったでしよ、

「我は無学の凡人ただびとなり」(使徒行伝4・13)

と。パウロは大いに学問もあったし、ヘブライやギリシヤの知識もあった。けれども、それがパウロの偉さではない。パウロはそんなものは全部、



「ちりあくた
塵芥」

と思っっている。キリストのみです。相対的な「有る」なんてものは「有る」のではない。絶対的な有はキリストである。そういうところに入ると、もう、行き詰まらない。何がどうなっても、どんなことにでつくわしても、逆に力がくる。ありがたいね、逆に力がくるんだから。運命環境どうでもござれ、ということになる。

西郷南洲が、

「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るもの也。此の始末に困る人ならすは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。」

と、

「始末に困る人」

と言ったが、本当に始末に困るひとになる。

今の政治家なんてのは、大西郷の伝記でも読んだらいい。日本には本当の政治家がいない。人物がいない。ひとつも人物教育がなされていない。学校の先生も人物をつくらなかつたらしょうがない。男の方でも女の方でも一番大事なのは、人生の目的はそういうことです。そのことはゲーテが言っている、

「人格性が大事なんだ」

と。マルチン・ルターは大いに聖書を勉強したひとだが、

「聖書も神の真理のかけらだ」

と言った。

「聖書はかけらに過ぎない。神の真理は盛りきれものではない」

と。だから、聖書の言の奥に神のもの凄い響きを、その時その時に神の響きを受けとらな
いとね。

「意味がどうだ」

ではない。意味の世界ではない。霊的現実の世界です。

「これはどういう意味だ」

なんて、聖書は意味を考えているうちはダメなんだ。いわゆる「研究会」とはそんなものだ。読んでいるうちに、その先に、自分で聖書の文句が新しく書けるようになる。

「パウロさん、ここところは少しまだるっこいねえ。あんたは、あまり言いすぎ
るよ。書きすぎたよ」

なんて言いたくなる。

●終り無き詩

私も、もうこの2月7日で満90歳になるけれども、この世の人生の最後のラストコースに入る。この調子だと、私は多分、100歳を突破すると思っってますけれども。まあ、どうで



もいいや、そんなことは。

「二日千年」

という言葉があるけれども、一日永遠なんだ。毎日毎日が永遠の質をもっている。

「どこでぶつ仆れても、アーメン、ハレルヤ!」

ということ。未完成の中に完成の姿がもう来ている。しかしながら、「完成」というのはダメなんです。無完成がいい。未完成ではなくて、無完成です。完成なんてものは無い。完成したらお終いなんだ。お終いのある人間になったらダメです。

「お終いの無い果てし無き」

というのが一番いい。これは無完成です。完成を知らない。私は今、詩を書いています、これが無完成の詩、終り無き詩なんです。

「これで終わりました」

なんていうプンクト(点)は打たない。ミケランジェロが彫刻して、最後の鑿^{のみ}は棄てた。それが本当の姿です。シューベルトが

「未完成交響楽」

というのを書いたが、あれはいい。とにかく、在り方が果てし無き、終り無き、という姿になってください。限り無くいく。無限無量、無際限に。

だから、私はこの世から去るときに、決して

「死んだ」

という言い方は絶対にしてもらいたくない。死なない。往生するんだ、往きて生きるんだ。

「小池辰雄は往生しました」

と言ってくれないければ。「死にました」なんて、そんなのは私は関係ない。死なないんだから。本当ですよ。皆さんもそういった烈々たる魂でいきましょう。ヒルティはこの世を去る時に、

「自分は隣の部屋に行くよつなものだ」

と言った。

●聖書は降参しながら読む

この頃のキリスト者では、賀川豊彦さんは素晴らしい人だ。賀川さんは本当に福音の身証者です。身体でもって証明した人です。いわゆる無教会の先生方よりも、私は賀川さんの方が本当のキリスト者だと思っている。無教会は言葉が多い。言葉の世界ではない。身体で証しする世界です。皆さん自身が活ける文字、動く文字なんです。天界に映っている。

「聖意の天に成るごとく地にも成らせ給え」

というが、この地の在り方が天界に活ける文字となって、霊的な文字となって映っているような、そういう在り方です。

人生は目的を持ちなさいよ。どういう目的でもいい。



「その人でなければならぬ」

という目的があるはずです。みな顔がちがう。そのように、みな使命はちがう。ひとまねは要らない。目的は神の栄光を現すための具体的なものです。自己を現すのではない。神の栄光の器となる。

私の目的は或るただ一つの詩を書くこと。世界に未だかつてないものを書きますから。ダンテは凄いものを書いたね、地獄、煉獄、天国と。世界の詩の中では私はダンテの『神曲』が最高のものだと思っている。ゲーテの『ファウスト』よりもダンテの『神曲』だ。『ファウスト』ももちろん凄いけれども。『神曲』にはあらゆる現実が映し出されている。凄いやつだ、あのダンテというのは。人間界には地獄もあれば、煉獄もあれば、天国もある。また我々の個人の中にもその三つが入っている。あれは流竄^{るざん}19年の旅の作品だ。みな命懸けの仕事です。我々は一人ひとりみな命懸けの仕事をしなさい。人にどう思われようと、どう見えようと、そんなことはどうでもいい。

「汝知りたもう」（詩篇第139篇）

とある。神さまは知っていらつしやる。キリストが知っていらつしやる、助けてくださる、導いてくださる、力を与えてくださる。

大体のクリスチャンは、キリストというものを自分の側から限定している。冗談じゃない。無限定の存在だから。その中に、こちら側は自分を投身しなければ。

「いやあ、凄いなあ」

と言つて投身する。創世記から黙示録にいたるまで、これはキリストの証しなんです。預言であり、証しである。これは大変なひとだ。地上は33年位でいつてしまったんだけど。聖書は本当に平伏さなければ読めない本です。

「参りました!」

と、降参しながら読んでいく。

「わかるの、わからないの」

ではない。降参しながら読む。そうすると、楽しい。

●聖霊の旗

『内村鑑三全集』（岩波書店1983年刊）の第34巻のところに、その日の、いわゆる山上の垂訓を先生が講義したところで、先生はこう書いています。

「今日は馬太伝五章二節四節を講じ、自分ながらに有難た涙に咽^{むせ}んだ。イエスの御言葉の意味深きに今更ながらに驚いた。」（1923年2月25日）

と、そう記されてあります。内村先生の話は私に聞きましたが、内村先生という人は自分で原稿をちゃんと作ってくる。原稿を見ながら話しているのだけれども、それは見ながらというよりも、また新しく話しているという、なかなかそういうことは妙境でした。そう



いう人です。無駄なことは言わない。なにしろ書いたものだから。けれども、それが読んでいるようではない。本当に話している。不思議な人です。そこへいくと、藤井武先生はもつと自由でした。家庭集会で私はうけたまわった。14、15人の集会でした。藤井先生というのは頭でものを言わない人だった。魂たましひ之霊の人でした。

私が初めて内村先生の集会につらなつたのは19歳でした。当時の先生は62歳でした。内村先生の詩に、

「孤軍健闘二十年 回顧難禁感謝涙

「反対何ぞ恐れん悪魔輩 勇進高掲十字旗」

（孤軍健闘二十年、回顧するに感謝の涙禁じ難し

「反対何ぞ恐れん悪魔の輩、勇進高掲十字の旗」

これは内村先生の漢詩です。内村先生はまさに「孤軍」だった。味方がいない。いわゆる無教会を旗印に掲げた。内村先生の歴史的な意味はわかるけれども、それは本当はエクレシアの一環なんだ。エクレシアの一環という大きな自覚をしないで、その後いつまでもただ、「無教会、無教会」

と言って、セクトとなつた。無教会がセクトになつたらダメなんです。藤井先生はセクト的な気持はなかつた。

「悪魔に反対されても恐ろしくなく、十字架の旗を高く掲げて勇ましく進んでいく」

と。私ならこれは聖霊旗です。聖霊の旗です。内村先生の始めた無教会は結局、十字架でお終いになっている。聖霊にこない。後で手島さんと集会をして、私は祈っていて霊に撃たれた。その時に聖霊のバプテスマを受けた。それから、無教会に聖霊の無いことがはっきりわかつた。

●降参・圧倒

本当に十字架されれば、あのルカ伝12章49節のとおり、聖霊の火が臨む。パウロは十字架。聖霊をはつきり受けとつた人です。だから、パウロは本当の使徒です。パウロの書翰の素晴らしきはそこにある。パウロは選びの器だ。それも、ユダヤ教を大いに標榜ひょうぼうしていたのが、ダマスコ途上でキリストにひっくり返された。

「何ぞ我を迫害するか！」

と、復活のキリストにやつつけられた。あれくらい見事な転回はない。三日三晩、ものが言えず目が見えず、何も食べられない。アナニヤに按手されて、

「わが目より鱗うろこのいときももの落ちたり」（使徒行伝9・18）

とある。

皆さん一人ひとり、人生のどこかで決定的な瞬間をいただかないといかん。それは自分の側の信仰なんてものではない。圧倒される。だから、



「参りました!」

と言つて降参しないと、本当の世界に入れない。そうすると、

「恵福なるかな、霊の貧しき者」

にされる。

「私がお前の霊を貧しくしてやった、ゼロにしてやった。そしたら、天国はお前のものになったよ」

ということなんです、あのキリストの言葉は。

「恵福なるかな、霊の貧しくされた者よ、

ゼロのうちに入れられた者よ、

天国は

即ち神・キリストのいらつしやるところが天国

汝のうちにあり」

「私はお前の中にいるぞ」

ということですよ。

私は塵芥ちりあくただから、キリストが入つてくださったから、皆さんに告白できる。私が偉くなつて立派なクリスチャンになつたから語っているのではない。それだったら、語らない。皆さんもうれしいでしょ、そういう塵芥が語っているんだから。

そういう角度から聖書を読んでも、やはり何といつても福音書です。特に福音書のキリストの言葉と行為、これはもう本当に参るね、輝いているから。

「聖書の中心は福音書なり」

とはつきり言える。旧・新約全部を含めて聖書の中心は福音書です。

大希望は黙示録、特に終りの方。旧約ではイザヤ書。旧約のイザヤ書は全聖書の集約みたいなものだ。イザヤ書というのは大変なものだ。イザヤ書66章は聖書66巻と同じ数なんだ。旧約ではイザヤ書はしっかり読んでください。詩篇よりもイザヤ書です。詩篇の中には愛という面が少ない。こつち側の祈りばかりで、向こう側の本願の祈りが少ない。イザヤ書と福音書です。もちろん、パウロの書翰もそれぞれの善さをもっています。ローマ書は凄い。エペソ書、黙示録の終りの方。何と言つても、聖書は永遠の本です。「聖書」なんて言わないで、永遠の書、不滅の書でもいい。驚くべき光の書でもいい。「聖書」なんて言うともつたいぶつてしまつてダメだよな。

私はこの聖書は三度目かな、ボロボロにしてしまつて。至るところに線がひつぱつてある。自分の聖書を見ていると、どこが大事だかスツツとわかる。中に書き込んだり、線を引いたり、ヘブライ語やギリシヤ語が書いてあつたり……。

そういうことで、どうぞ、楽しく勇ましく進んでいきましょ。

